

氏 名	関 根 裕 子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2 8 5 8 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	ホフマンスタールと日本 ―大正の『エレクトラ』公演をめぐる―

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	相澤 啓一
副 査	筑波大学 教 授	博士（学術）	加藤 百合
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	濱田 真
副 査	筑波大学 名誉教授		井上 修一

論 文 の 要 旨

本論文は、オーストリアの世紀転換期の詩人フーゴ・フォン・ホフマンスタール（1874-1929）と日本の交流関係を論じたものである。ホフマンスタールは早熟の詩人として、ヨーロッパにおける言語危機を敏感に感じ取り、チャンドス卿の名を借りた『手紙』において言語不信を表現する一方で、危機からの脱出の契機をギリシアを含むオリエントに求めていったが、そうした中で日本への関心も育ち、それが創作活動に一定の影響を持ったことを、著者はまず明らかにしている。他方、彼のオリエント観が反映されたギリシア翻案劇『エレクトラ』（1903）は、松居松葉が新派俳優の河合武雄らと旗揚げした公衆劇団により 1913 年に帝国劇場で日本初演されており、その前後にホフマンスタールと松居および森鷗外との間で交わされた書簡は、ホフマンスタールと日本の直接の交流を示す貴重なドキュメントとなっている。本論文は、これまでその存在が知られていなかった貴重な書簡も踏まえつつ、まだ日欧間での情報交流が限られて相互理解が十分とは言えなかった時代に、ホフマンスタールと日本の間でどのようなアプローチや交流がなされたのかをたどることにより、当時の非対称の東西文化交流の実相を探り、その意味を論じたものである。その構成は以下の通りである。

第Ⅰ章では、言語危機から再出発して全体的表現を求めたホフマンスタールにニーチェが与えた影響を考察している。ニーチェは「オリエント」からの視線を通してヨーロッパを見直したが、ホフマンスタールも、内なる精神が外に表出されるような全体的表現を可能とする「未知の言語」を探求するために「オリエント」や、さらに東の日本からヒントを得ようとしていた、と本論文はまず確認している。

第Ⅱ章は、古典主義者たちが模範とした均整のとれたアポロ的ギリシア像ではなく、ニーチェの影響下でディオニュソス的ギリシア像が色濃く出たホフマンスタールの作品群、『エレクトラ』、『恐れ／対話』、『ギリシア』を解釈し、ホフマンスタールにとってのオリエントを再構成している。

第Ⅲ章は、ホフマンスタールにとっての日本を詳細に扱い、ジャポニズムの流行以前からの日本への関心、19世紀末の「若きウィーン派」とジャポニズムの関係、とりわけラフカディオ・ハーンの影響について考察している。とくに「若きヨーロッパ人と日本人貴族との対話」（未完）には、オリエントの精神と肉体のバランスのとれた統一的人間を理想像とすることで、分析的になりすぎたヨーロッパ精神に警鐘を与えている表現があると指摘し、理想化された日本にかけられた期待のありようを分析している。

第Ⅳ章は、貞奴、セント・デニスなど、非ヨーロッパ世界の身体表現がホフマンスタールに及ぼした影響について考察し、『エレクトラ』の踊りのシーンのオリエント的側面を分析している。

以上四章が論文前半部であるが、ここではホフマンスタールが1900年前後から第一次世界大戦中の1917年頃まで断続的に日本にいていた関心の詳細が、さまざまな資料に即して論じられている。まだ日欧交流のチャンネルが乏しかったこの時期、日本についての正確な情報を継続的に取得することは難しく、また次第に日本が帝国主義的な外交を進めていったこともあって、ホフマンスタールの日本への関心がそれ以上深化することはなかったが、近代における言語の在り方に危機感と閉塞感を持った世紀末ヨーロッパの代表的知識人ホフマンスタールが、言語危機の閉塞状態の打開の糸口を、自らのイメージを強く投影したオリエントに求めた様子を、そしてその関連の中で日本がホフマンスタールにこれまで考えられていた以上の大きな影響を及ぼしている様子を、本論文は説得力を持って描いている。

続く第Ⅴ章は、第Ⅳ章までの記述とは逆に、ホフマンスタールが日本でどのように受容されたのかを扱っている。日本は当時、近代化をめざす過程で西欧文化に接し、圧倒的な魅力を持って迫る西洋から学ぶ一方で、日本的なものを完全に否定したくないとの思いにも揺れ動きつつ、精一杯背伸びをして試行錯誤の受容を続けていた時期であるが、本論文が焦点をあてているのは1913年にホフマンスタールの『エレクトラ』を初演した松居松葉(1870-1933)である。著者は、ホフマンスタールと松居松葉や森鷗外との往復書簡など、この公演の前後に書かれた当時の貴重な往復書簡を発掘しつつ、この公演に向けた日本側の上演意図や状況だけでなく、ホフマンスタールが日本での公演に破格の期待を寄せた様子も明らかにした上で、この公演が、単なる和洋折衷ではなく和洋融合をめざして舞台を創造した点を評価している。

この『エレクトラ』日本公演がいかなるものであったか、著者は詳しく再構成したうえで、その意義を今日の視点から以下のようにまとめている。すなわち、一方では、たしかに時代的制約も大きく、上演レベルがお粗末だったり語学力を含めた理解不足が目についたりするのは否めず、場当たりのとしか言えないような演出や茶番のような破綻も目につかざるをえない。しかし他方、ヨーロッパ事情に詳しいがゆえに最も辛辣な批評眼をもって松居を突き放した小宮豊隆や、さらに一層高い地点から醒めた目で観察していた鷗外の発言にも表れているように、単なる上演レベルの問題を越えた地点に、異文化間の出会いと理解の可能性と問題点を看取できるのである。本論文は、まだ限られた情報しかないにもかかわらず強く互いを求め合ったホフマンスタールと日本の非対称的な交流と情熱のなかに、単なる興味深い大正期の日欧文化交流のエピソードだけでなく、試行錯誤の異文化間の交流だったからこそ開かれた極めて生産的な異文化理解の可能性を見出している。異文化交流が持ちうる意味と矛盾を集約的・象徴的に表しているこの『エレクトラ』上演は、情報交流が進むことでむしろ異文化理解の意欲や意味が薄れがちになるという逆説の中に生きる現代の私たちに、依然としてアクチュアルな問題を提起し続けている、と著者は結論づけている。

審 査 の 要 旨

1 批評

ホフマンスタールの受容史を扱う論文は内外に数多いが、日本との関係を論ずる論文は極めて少なく、双方向の交流関係を論ずる試みは本論文をもって嚆矢とする。著者は、まずホフマンスタールの日本への関心を丹念に跡づけることで、ホフマンスタール研究において日本が決して瑣末なテーマではないことを示している。ニーチェの強い影響を受けたホフマンスタールにとって日本がギリシアやインドとともにオリエンの一部をなし、ヨーロッパの言語危機の打開をオリエンに求めようとしていたとの主張は、説得的である。日本への関心の例として著者はまず、言語危機の表現として名高い『(チャンドス卿の) 手紙』と同時期に執筆された「若きヨーロッパ人と日本人貴族との対話」(未完)をあげ、日本人貴族にヨーロッパ批判を語らせることでヨーロッパの文化再生を図った構造を分析する。あるいはまた、ホフマンスタールがラフカディオ・ハーンを用いた「前世」という仏教的観念を「プレエクシステンツ (前存在)」と読み替え、この語を自らの保守革命的思想のキーワードとしていったプロセスの分析もまた、自らの重要な思想を日本に仮託して表現した例として強い説得力を持っている。しかしそれにも増して本論文の大きな価値は、論文後半において日本におけるホフマンスタール受容の重要な里程標となった『エレクトラ』日本初演を取り上げ、同床異夢の双方向交流に潜むポテンシャルを見事に浮かび上がらせた点にある。その際著者は、それまでフランクフルトのアーカイブに眠っていた鷗外のホフマンスタール宛書簡を発見し、またホフマンスタールが使用したハーンを始めとする日本関連文献を確認するなど、資料調査面でも特筆すべき貢献をあげている。

このように大きな成果をあげた論文であるが、問題がないわけではない。記述にやや繰り返しが多く、オリエンタリズムなど最近の理論研究のフォローをより深めたい所でもむしろ多様な関連話題への広がりを優先する傾向があるため、全体として多少記述が散漫となる傾向も否めない。とはいえ、これらはホフマンスタールと日本というテーマについて新たな知見をまとめた本論文の価値を減じるものでは全くない。

イタリア人の演技指導のもと、男性俳優だけを用いた松居の公演のレベルは、当然ながら期待したほどではなかったと推測される。しかし、日本からの思いがけない上演オファーの報に接したホフマンスタールが松居に書き送った「死にゆくエレクトラの踊りは、きっとどんなヨーロッパの女優よりも日本人女優の方が(日本人男優でも)上手に表現するでしょう」とのエールは、単なる社交辞令ではなく、まさに本論文の構想の正しさを裏付けるものであるように思われる。著者は、松居による『エレクトラ』公演が、オリエンに危機脱出の可能性を見たホフマンスタールが本気で日本に寄せた理念的期待と、手本とされたヨーロッパ文化に向けられた日本からのアンビヴァレントな視線とが交錯した接点に位置していることを見事に示し、その意味を説得的に論じている。本論文がホフマンスタールの中に確認した日本への強い理念的期待が意味するものは、今後のホフマンスタール解釈や上演にとって無視できない要素になったと言えるだろう。

2 最終試験

平成 30 年 1 月 24 日、人文社会科学科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、所定の学力確認を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。